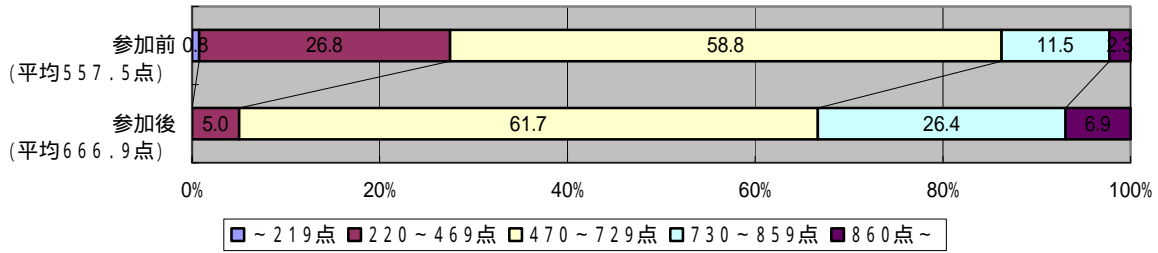


海外就業体験に参加して以降の職業・キャリア等に関すること

1 海外就業体験に参加して以降の外国語能力

(1) 海外就業体験に参加して以降(帰国後1年以内)の外国語能力を見ると、TOEIC受検者の平均点は666.9点であり、参加する以前のTOEIC受検者の平均点557.5点(上記の5)に比べ109.4点向上している。(図25)

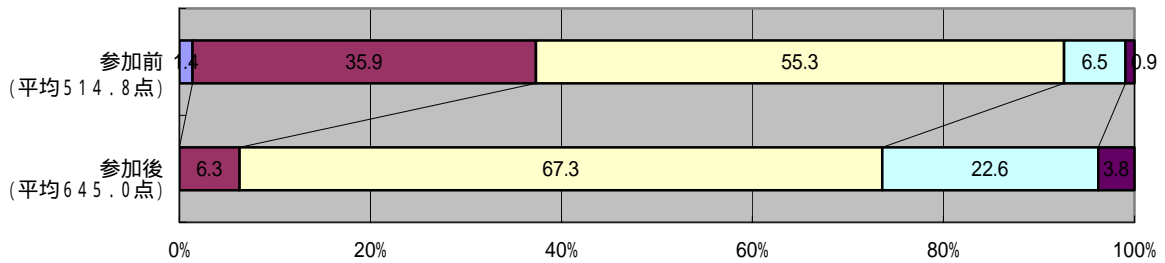
図25 海外就業体験に参加して以降の外国語能力
TOEICの得点



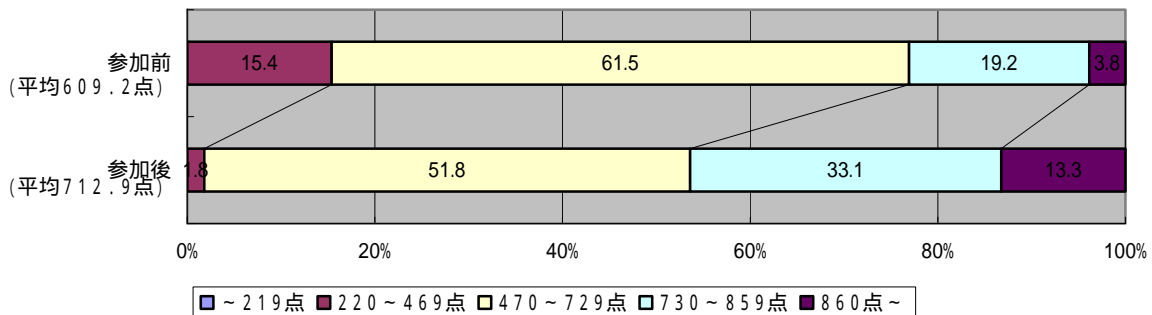
() TOEIC受検者の平均点は、海外就業体験の前後で同一の母集団を対象に把握したものではなく、海外就業体験の前又は後に受検したことがある者の点数をそれぞれ単純に平均して得た数値である。

(2) また、これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、ワーキング・ホリデー経験者で130.2点、国際インターンシップ経験者で103.7点、それぞれ得点の向上を見ている。(図26)

図26 海外就業体験に参加して以降の外国語能力
TOEICの得点
(ワーキングホリデー)



(国際インターンシップ)

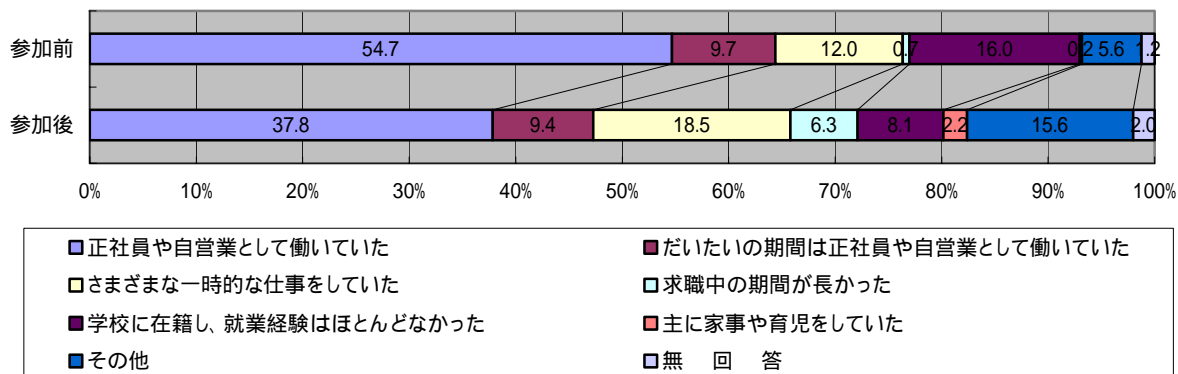


2 海外就業体験に参加して以降の過ごし方

(1) 海外就業体験を参加して以降の主な過ごし方を見ると、「正社員や自営業として働いていた」

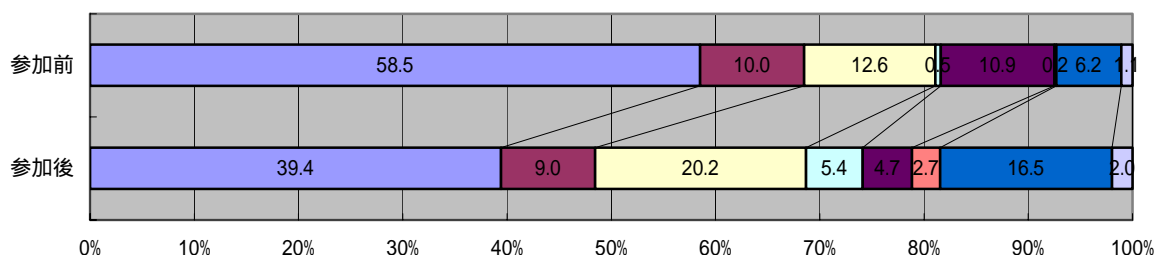
が 37.8%、「さまざまな一時的仕事をしていた」が 18.5%などとなっており、参加する以前の主な過ごし方（上記の3）と比較すると、「正社員や自営業として働いていた」とする人の割合が 16.9 ポイント減少している。（図 27）

図 27 海外就業体験に参加して以降の過ごし方

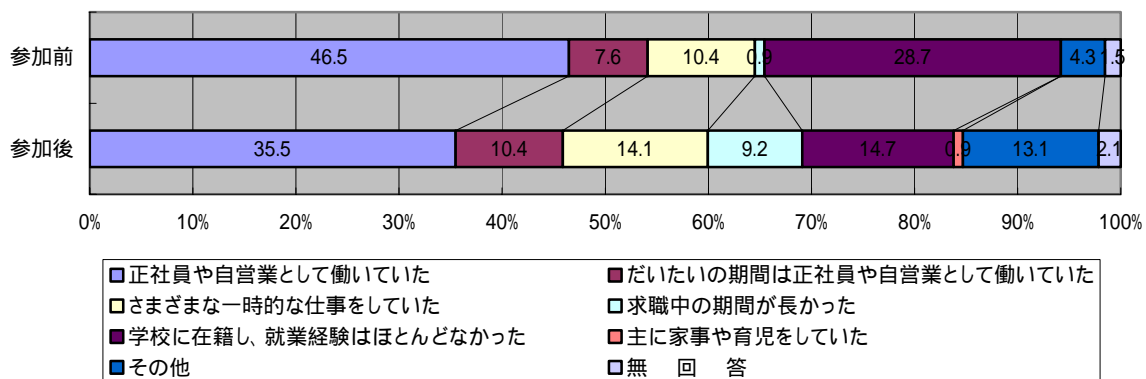


（2）また、これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、帰国後の期間が短い人が多く含まれていることはあるが、「正社員や自営業で働いていた」とする人の割合は、ワーキング・ホリデー経験者で 19.1 ポイント、国際インターンシップ経験者で 11.0 ポイント低下している。（図 28）

図 28 海外就業体験に参加して以降の過ごし方
（ワーキングホリデー）



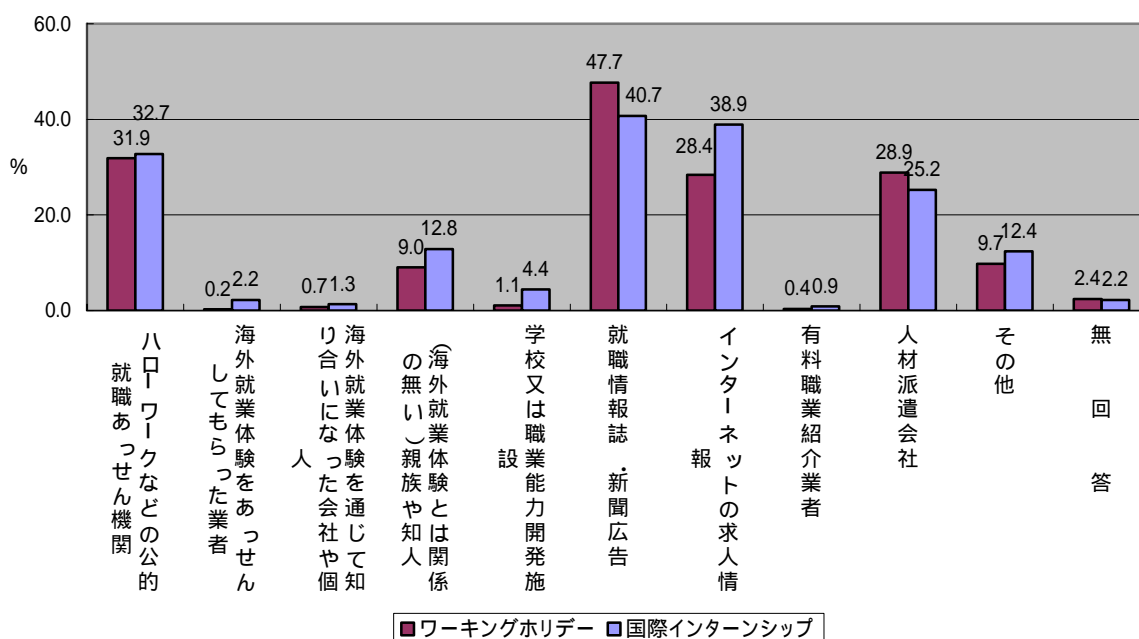
（国際インターンシップ）



3 海外就業体験に参加して以降の求職活動の方法

海外就業体験に参加して以降に就業し、又は求職活動をした人がどのような機関、メディアを使って求職活動をしたかをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「就職情報誌・新聞広告」が47.7%、「公的就職あっせん機関」が31.9%などとなっており、後者では「就職情報誌・新聞広告」が40.7%、「インターネットの求人情報」が38.9%などとなっている。(図29)

図29 海外就業体験に参加して以降の求職活動の方法
(複数回答)



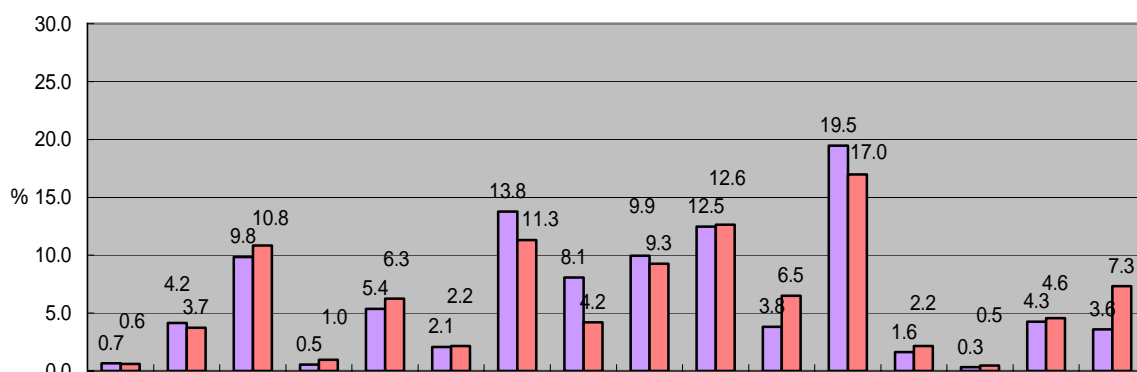
4 現在就いている職業

(1) 現在就いている職業の業種

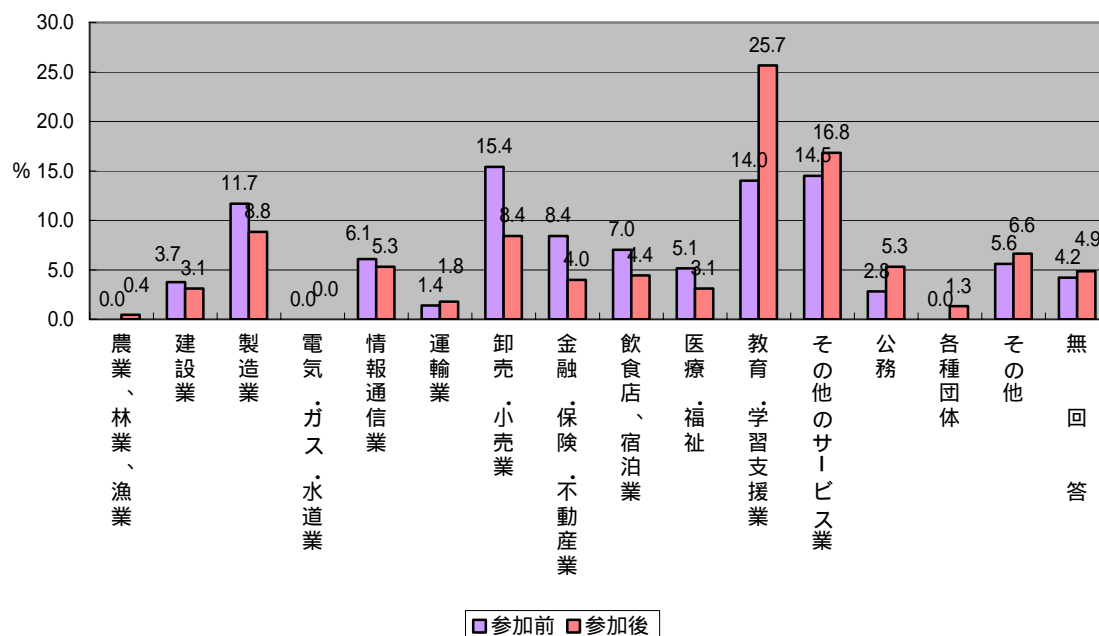
現在就いている職業の業種をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「その他のサービス業」が17.0%、「医療・福祉」が12.6%、「卸売・小売業」が11.3%などとなっており、後者では「教育・学習支援業」が25.7%、「その他のサービス業」が16.8%、「製造業」が8.8%などとなっている。

これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業の業種(上記の4の(1))と比較すると、国際インターンシップ経験者で「教育・学習支援業」の割合が11.7ポイント増と大幅に伸びている。(図30)

図30 現在就いている職業の業種
(ワーキングホリデー)



(国際インターンシップ)

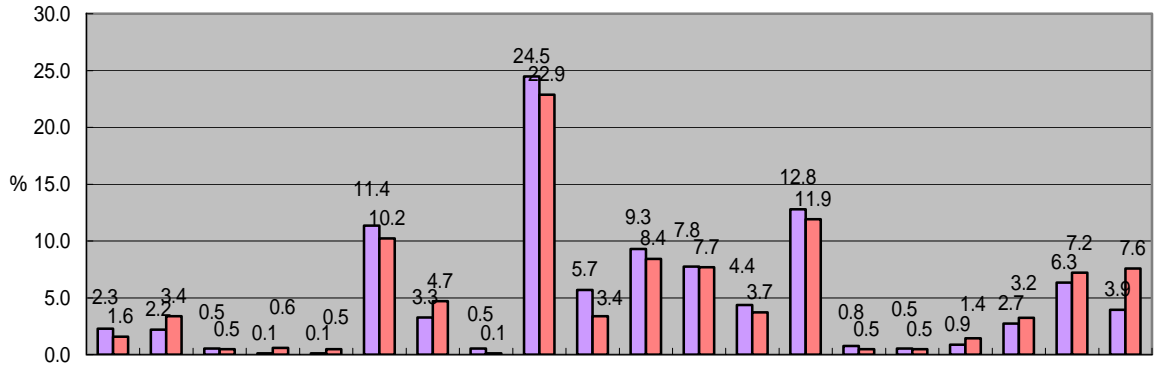


(2) 現在就いている職業の職種

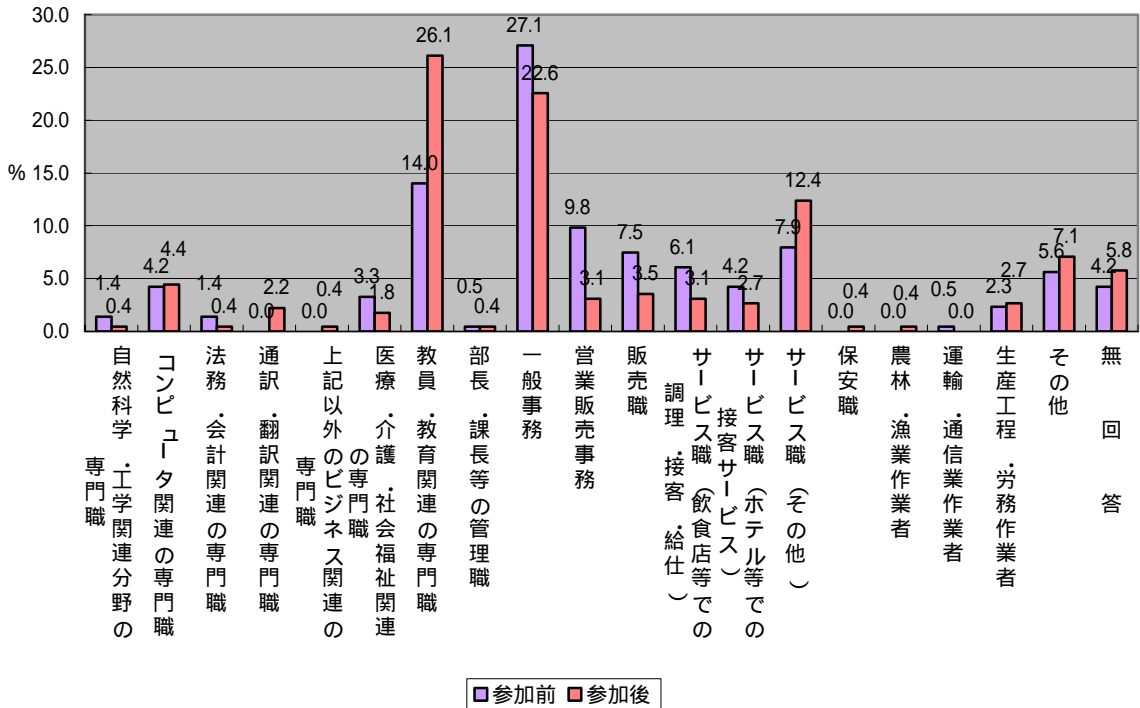
現在就いている職業の職種をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「一般事務」が22.9%、「サービス職(その他)」が11.9%、「医療・介護・社会福祉関連の専門職」が10.2%などとなっており、後者では「教員・教育関連の専門職」が26.1%、「一般事務」が22.6%、「サービス職(その他)」が12.4%などとなっている。

これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業の職種(上記の4の(2))と比較すると、国際インターンシップ経験者で「教員・教育関連の専門職」の割合が12.1ポイント増と大幅に伸びている。(図31)

図31 現在就いている職業の職種
(ワーキングホリデー)



(国際インターンシップ)

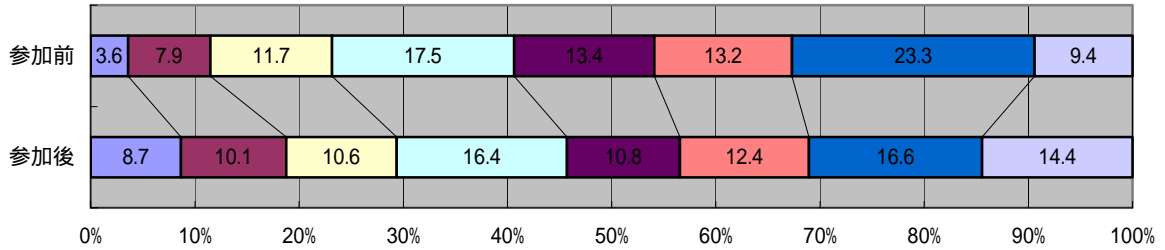


(3) 現在就いている職業の事業所規模

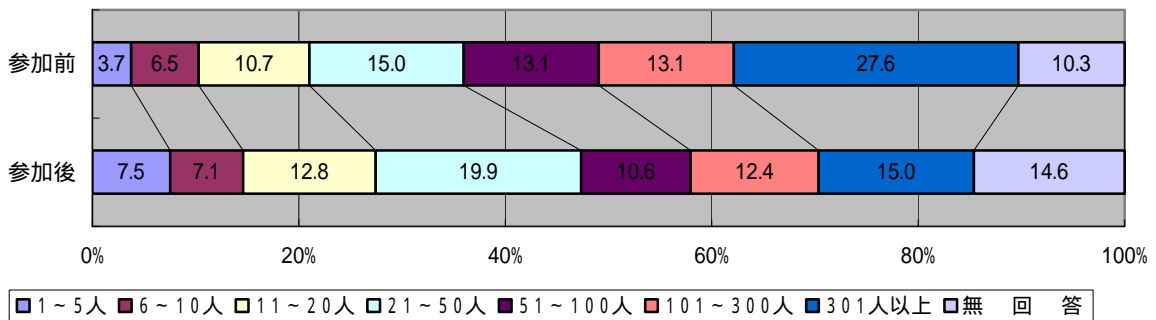
現在就いている職業の事業所規模をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「301人以上」が16.6%、「21~50人」が16.4%、「101~300人」が12.4%などとなっており、後者では「21~50人」が19.9%、「301人以上」が15.0%、「11~20人」が12.8%などとなっている。

これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業の事業所規模(上記の4の(3))と比較すると、ワーキング・ホリデー、国際インターンシップのいずれの経験者についても規模の小さな事業所に就業している者の割合がわずかながら増えている。(図32)

図32 現在就いている職業の事業所規模
(ワーキングホリデー)



(国際インターンシップ)

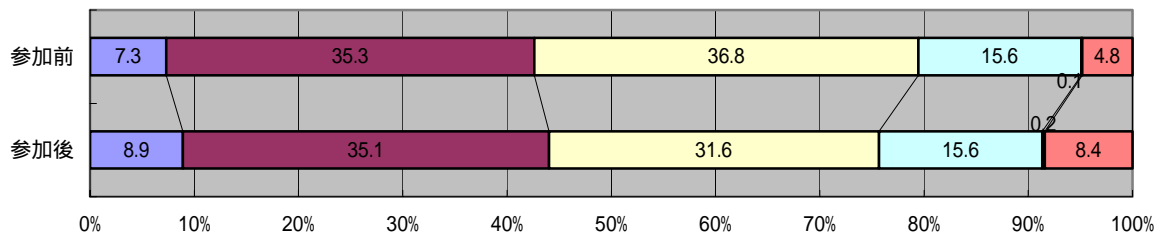


(4) 現在就いている職業で期待されている学力レベル

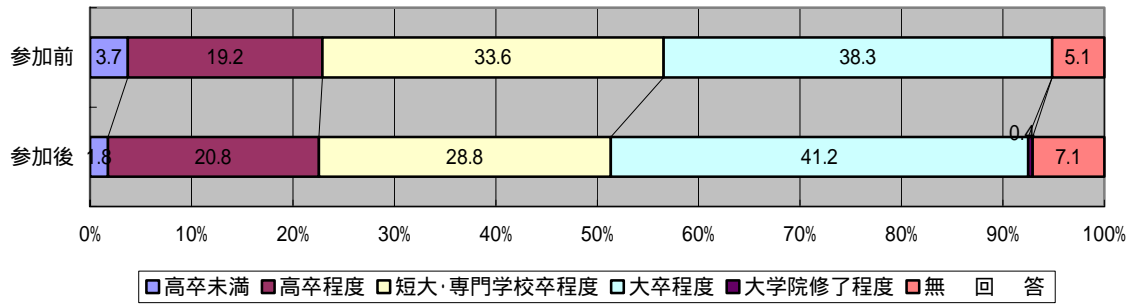
現在就いている職業で期待されている学力レベルをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「高卒程度」が35.1%、「短大・専門学校卒程度」が31.6%、「大卒程度」が15.6%などとなっており、後者では「大卒程度」が41.2%、「短大・専門学校卒程度」が28.8%、「高卒程度」が20.8%などとなっている。

これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業で期待されていた学力レベル(上記の4の(4))と比較すると、ワーキング・ホリデー、国際インターンシップのいずれの経験者についても大きな変化は見られない。(図33)

図33 現在就いている職業で期待されている学力レベル
(ワーキングホリデー)



(国際インターンシップ)

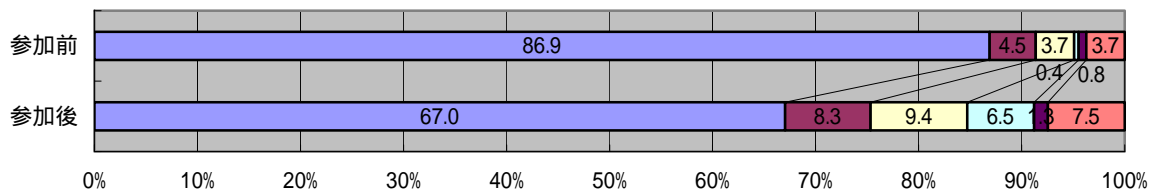


(5) 現在就いている職業で期待される外国語能力

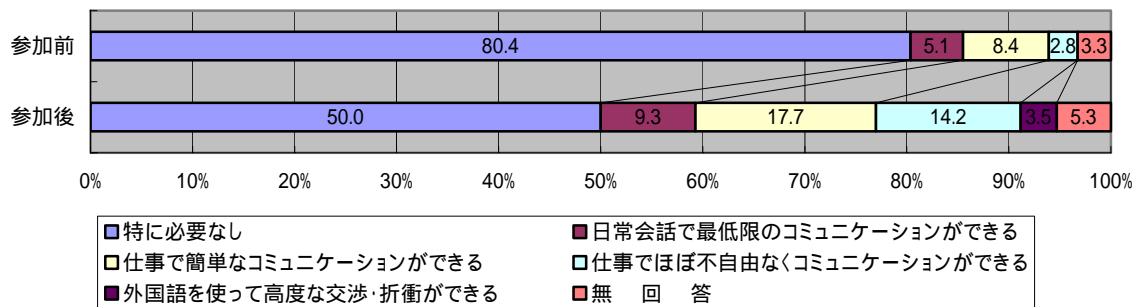
現在就いている職業で期待されている外国語能力をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「特に必要なし」が67.0%、「仕事で簡単なコミュニケーションができる」が9.4%、「日常会話で最低限のコミュニケーションができる」が8.3%などとなっており、後者では「特に必要なし」が50.0%、「仕事で簡単なコミュニケーションができる」が17.7%、「仕事でほぼ不自由なくコミュニケーションができる」が14.2%などとなっている。

これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業で期待されていた外国語能力(上記の4の(5))と比較すると、「特に必要なし」とする者の割合がワーキング・ホリデー経験者で19.9ポイント、国際インターンシップ経験者で30.4ポイント減少しており、帰国後に外国語能力を要する職業に就いた人が増えていることを示している。(図34)

図34 現在就いている職業で期待される外国語能力 (ワーキングホリデー)



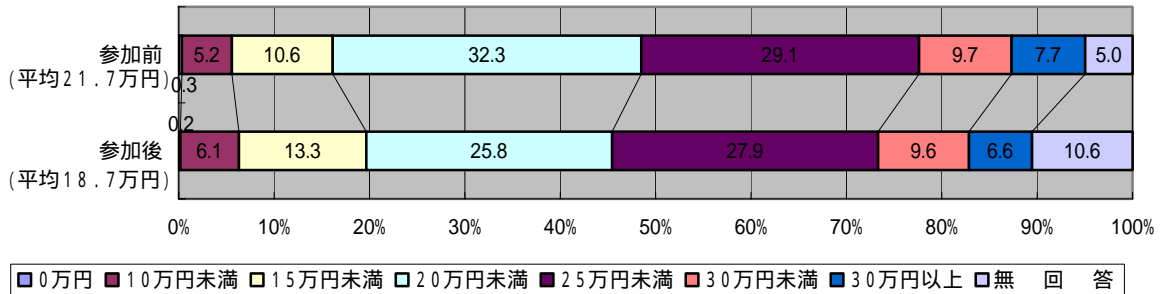
(国際インターンシップ)



(6) 現在就いている職業の税込み平均月収

現在就いている職業の税込み平均月収は、18.7万円となっており、これを海外就業体験に参加する以前の主たる職業の平均月収(上記の4の(6))の21.7万円と比較すると、約3万円の減少となっている。(図35)

図35 現在就いている職業の税込み平均月収



() 平均月収は、海外就業体験の前後で同一の母集団を対象に把握したのではなく、正確には次のとおり把握した。

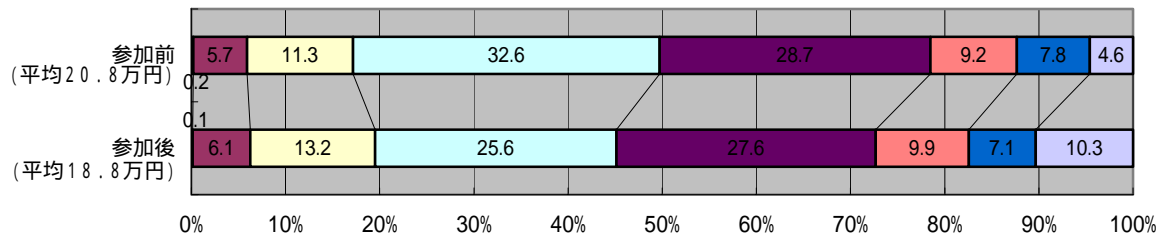
海外就業体験前の月収：海外就業体験に参加する以前の主な就業経験における平均月収(主として学校等に在籍し、又は家事等に従事していた人を除く)

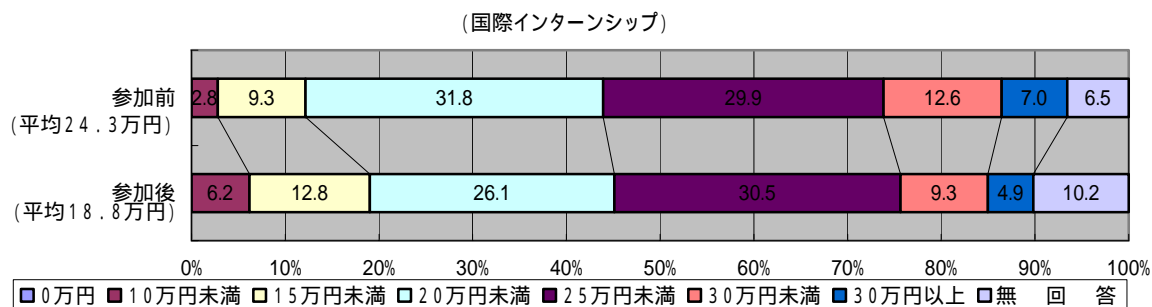
海外就業体験後の月収：現在の職業(現在職業についていない者はその直近の職業)における平均月収(学校等に在籍し、又は家事等に従事している人を除く)

また、これをワーキング・ホリデー、国際インターンシップのプログラム別に見ると、ワーキング・ホリデー経験者で2.0万円、国際インターンシップ経験者で5.5万円の減少となっている。

(図36)

図36 現在就いている職業の税込み平均月収
(ワーキングホリデー)

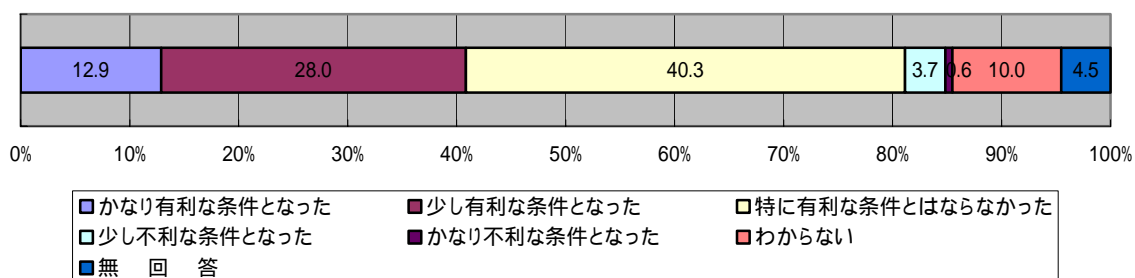




5 帰国後の就職条件

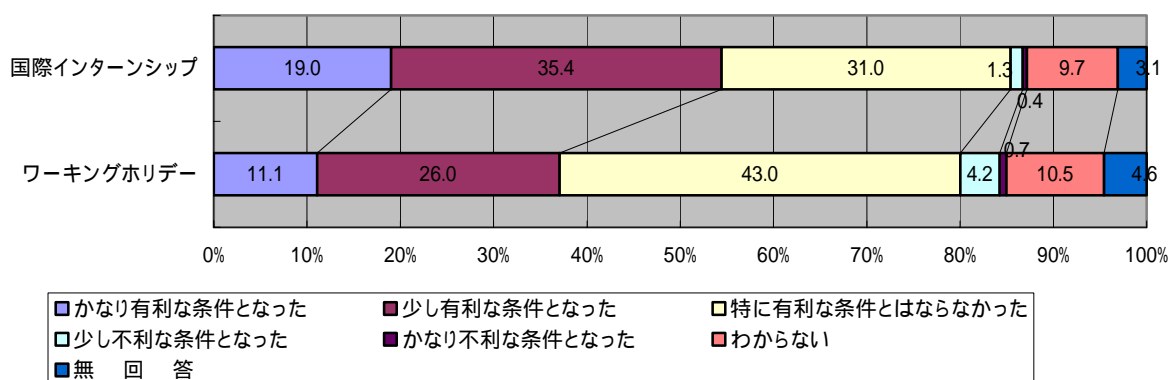
(1) 海外就業体験が帰国後の就職に当たって有利な条件となったかどうかを見ると、「特に有利な条件とはならなかった」が40.3%、「少し有利な条件となった」が28.0%、「かなり有利な条件となった」が12.9%、「少し不利な条件となった」が3.7%、「かなり不利な条件となった」が10.0%、「わからない」が4.5%などとなっている。(図37)

図37 帰国後の就職条件



(2) また、これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「特に有利な条件とはならなかった」が43.0%と最も多く、次いで「少し有利な条件となった」が26.0%、「かなり有利な条件となった」が11.1%などとなっており、後者では「少し有利な条件になった」が35.4%と最も多く、次いで「特に有利な条件にはならなかった」が31.0%、「かなり有利な条件になった」が19.0%などとなっている。(図38)

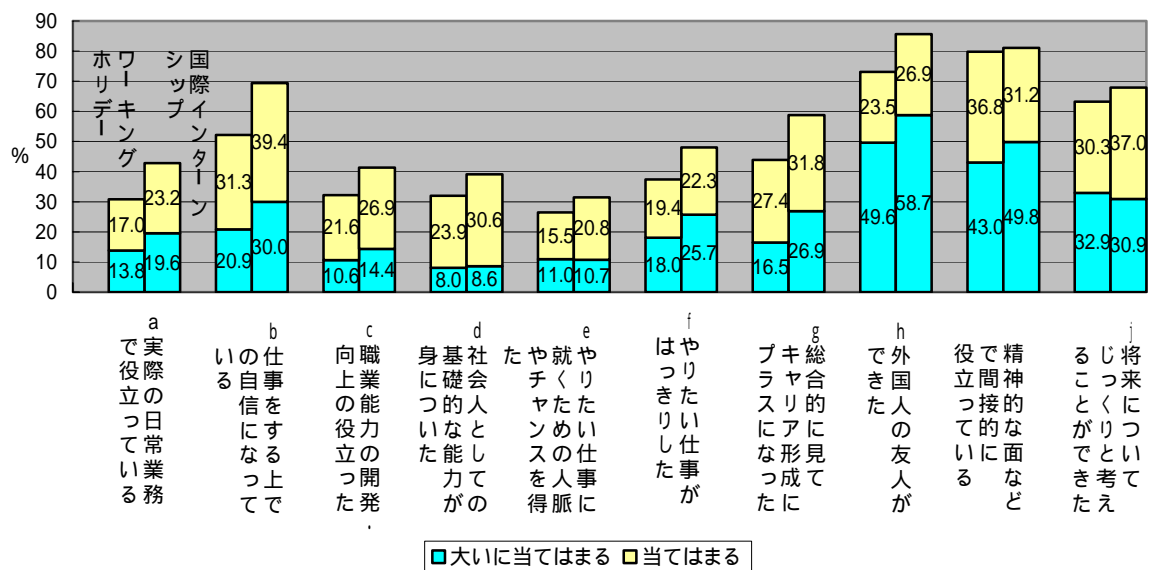
図38 帰国後の就職条件



6 海外就業体験が役に立っていること

海外就業体験がどのような面で役に立っているかをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「精神的な面などで間接的に役に立っている」の79.8%（「大いに当てはまる」と「当てはまる」の合計。以下同じ。）、「外国人の友人ができた」の73.1%、「将来についてじっくりと考えることができた」の63.2%の順で高くなっており、後者では「外国人の友人ができた」の85.6%、「精神的な面などで間接的に役に立っている」の81.0%、「仕事をする上での自信になっている」の69.4%の順で高くなっている。（図39）

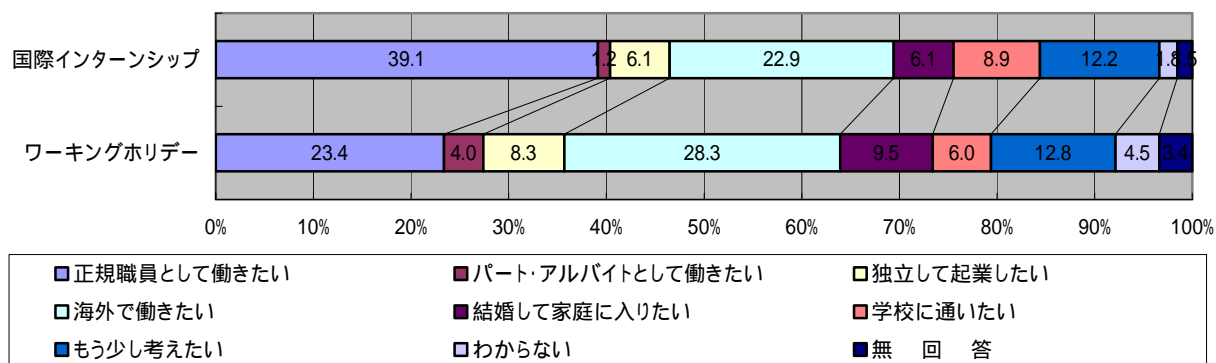
図39 海外就業体験が役に立っていること



7 現在の予定

現在どのようなことを予定しているかをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「海外で働きたい」が28.3%、「正規職員として働きたい」が23.4%、「もう少し考えたい」が12.8%の順で高くなっており、後者では「正規職員として働きたい」が39.1%、「海外で働きたい」が22.9%、「もう少し考えたい」が12.2%の順で高くなっている。（図40）

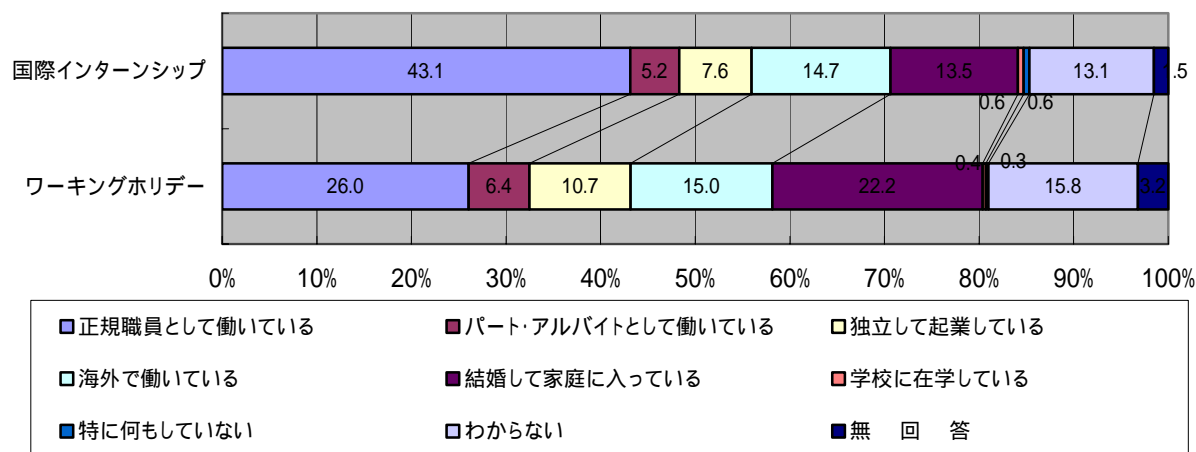
図40 現在の予定



8 10年後のキャリア

10年後のキャリアについてどのように考えているかをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「正規職員として働いている」が26.0%、「結婚して家庭に入っている」が22.2%、「わからない」が15.8%の順で高くなっており、後者では「正規職員として働いている」が43.1%、「海外で働いている」が14.7%、「結婚して家庭に入っている」が13.5%の順で高くなっている。(図41)

図41 10年後のキャリア



海外就業体験に対する支援策に関すること（自由記述における代表的な意見）

1 帰国後のフォローに関すること

帰国後のアフターフォローの充実。海外経験者向けの就職支援ホームページがあればいい。

海外の日本人は、帰国後の就職についてとても不安に思っている。情報をシステムチックに提供することが大切である。

精神的な面でのプラスが大きいと思うので、帰国後それらを発表できる場所作りや、それを具体的な進学、就業に反映させて、落とし込める様なサポート体制があると良いと思います。

2 渡航前の準備等に関すること

渡航前にどのような求人があるか知ることができ、応募できたらと思います。オーストラリアで生活している時、無料の日本語情報誌を愛用していましたが、そこに載っていた求人やシェアメイト募集の情報がインターネットで検索でき、メールで応募できれば良いと思います。

学校、ホームステイ先の斡旋などはもっと詳しい情報があればと思う。本当にひどいステイ先に当たった友人はたくさんいる。（食事がでない、自由がない、等々）

3 経費支援に関すること

私が参加したものは教材費も含め、全くのボランティアだったので金銭的に苦しかった。条件付でもいいので、補助金や奨学金の制度等あれば、活動に幅をもたせることができたと思う。

私は報酬がなかったので、せめてアルバイトができるビザがもらえれば現地での活動も幅が広がったと思うので、労働ビザの発給支援。

4 制度的枠組みに関すること

ワーキング・ホリデーの年齢制限が緩和されるといいと思います。一度、語学留学をしていたので、金銭的余裕があまりなかったので、本当は、ワーキング・ホリデー制度を利用したかったけれど、年齢的に無理でした。

ワーキング・ホリデービザのような、自由で制限のないビザを増やす。行ける国をもっと増やして欲しい。

5 その他

海外で将来を考えた上で、もう一度勉強をやりたいと思う方はとても多いと思います。大学や専門学校などで、編入学や社会人枠のある環境が増えると、とてもうれしく思います。

もっとたくさんの若者にこういう制度があることを知って欲しい。まだまだ知らない人が多いと思います。大学の就職課のポスターなど、学生時代から知っていればと思うことがあります。